

2026～2027年度地区ビジョン

繋げよう！変化からインパクトへ



厚木県央ロータリークラブ

我がクラブが国際奉仕を始めたきっかけ。

- ・クラブ創立以来、横浜ベイスターズの選手を招いて野球教室を開催してきたが、毎年開催する事でマンネリ状況となっていた。

（初めは内川選手なども参加してくれたが回を重ね選手も？）

- ・クラブの奉仕活動だが窓口である会員に一任状態で、またクラブ財政的に負担も大きい状況になっていた。

- ・創立20周年を機に変化を求めて会員参加で、選手や子供達と共にゲーム形式の野球教室を開催。そしてそれまで窓口となっていた会員に理解を頂き一回ピリオドを打つ事になった。ただ継続的事業を止めるのは結構大変です。（変化から～）

- ・新たなプロジェクトを始めるにあたり、余り他のクラブが実施していない国際奉仕の活動に挑戦する事とした。（インパクトへ）

見学 ➡ 県央RCメンバーが主体的に参加

少年野球教室を検証する



アトラクション ストライクナイン



アトラクション
スピードガンコンテスト



創立21年目からラオ・フレンズ小児病院医療支援のプロジェクトを開始！

- ・運営するNPO法人フレンズ・ウィズ・アウト・オブ・ボーダー・JAPANを通しての支援活動。代表の赤尾和美氏は同病院の訪問看護部長を兼ねる。そしてカンボジアのシェムリアップにて同様の病院を開院、約10年をかけて現地スタッフを育成し病院の施設と運営すべてを現地に無償譲渡。新たにラオスにて展開した病院。
- ・同病院は東南アジア最貧国ラオス北部の都市ルアンパバーンの県立病院（中国支援）の一角にあり、県立病院から独立した運営の無償で子供達の診療を行っている病院。



本格活動が始まった支援2年目のテーマ

「ラオスの子供たちに笑顔を届けるプロジェクト」

- 昨年に引続き国際奉仕プロジェクトとしての事業の展開を図る。
- 昨年訪問したラオフレンズ小児病院についてより深く理解する。
- 支援物資「点滴用シリンジ」入手の為の支援。
- 昔の日本の子供たちの遊びを通しラオスの子供たちに笑顔を届ける。
- プロジェクトを通し病院スタッフとの交流を図る。
- NPO法人や病院スタッフから病院、診療についての現状や課題について見聞する。
- 今後の補助金事業としての対象となる活動としての検討

「厚木県央ロータリー ラオス支援 タスクフォース AKR L TF」

ラオスに向け「AKR L TF」

当初9人が参加予定でしたが、コロナの影響で残念ながら、4人の会員が断念せざるをえず、5人でルバンパーンに向かう事となりました。

令和2年（2020年）2月20日成田空港にて（因みに2と0ばかり）10日後にコロナでロックダウンぎりぎりで行訪問出来ました）



成田空港にて



ルアンパーン空港

「AKR L TF」ラオ・フレンズ小児病院到着

「子供たちに笑顔を届けるプロジェクト」和田委員長発案の日本の縁日が受け容れてもらえるか少々不安ですがいよいよ本番です。まずは縁日の景品と千羽鶴を運びます。

このような機会がなければ、間違いなくラオスを訪問する事などなかっただろうと考えると不思議な感慨が込み上げます。



目 録 贈 呈

今年度の支援の目録と先日の例会で会員全員が折った千羽鶴を赤尾さんに井会長より贈呈。

第2回訪問 「ラオスの子供達に笑顔を届けるプロジェクト」。ただ、ラオスの子供達の反応は今一だった。今後の課題を考え次回に備える事とした。

目録、千羽鶴、ミッションで使用する輪投げセットと景品。





第3回訪問「ラオスの
子供達に笑顔を届ける
プロジェクト」
第2弾。

前回の反省に基づき、
単純な日本の昔の遊び
を実施！



大成功で大変好評でした。





第4回訪問 ラオ・フレンズ小児病院 開設10周年に招待されました。



支援前の農場の様子

敷地はかなり広い（2反程度）のですが、すべて人力作業で農機具の機械化はまったくなされていないので、作物を耕作してある場所は農園の一部しか使い切れていません。そしてご覧の通り土壌が非常に悪く、また雨季や乾季のといった地域的な条件もあり、農作業はかなり過酷な状況でした。

土壌も非常に硬く、2～3坪ほどの土地を人力で耕すのに2日は掛かるとの事で、効率も非常に悪く収穫量も土地の大きさに比べ少ないようです。



更なる院内農園の問題点

写真でご覧の通り農園では現在、作物への散水は3ヶ所のタンクに溜めた水をジョウロで汲んで撒いています。熱帯から亜熱帯に属するラオスでは、この程度の散水方法では、作物の歩留まりもかなり低いのではと考え、赤尾さんに聞いたところやはりその様な状況だそうです。そこでその対策を検討する事と致しました。

見ての通り大きいですが状況は家庭菜園に毛が生えた様な畑です。

現状の散水状況



院内農園の現状と機械

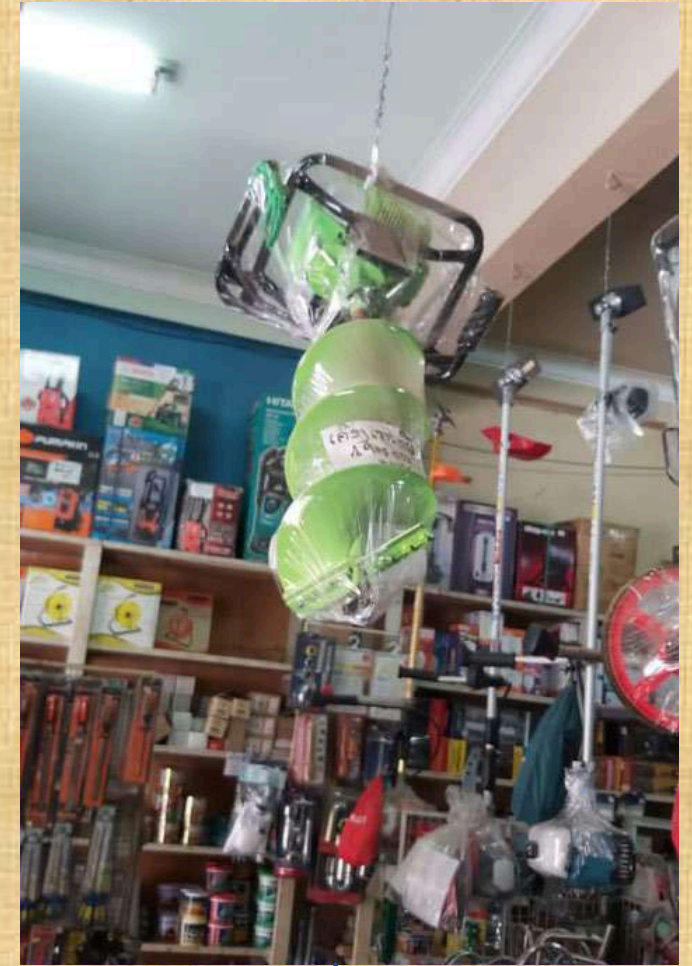


こんな感じで使うようです。



この穴掘り用ドリルが唯一の機械

日本の畑では崩れてしまいますね。



アースドリルみたいな物ですかね。

こんな状況なので耕運機による機械化を提案したが最初には要らないと言われてしまった。何と彼等は耕運機自体を知らなかったようです。

数日後、耕運機を調べたようでは是非、寄贈をお願いしたいとの申し出があり、日本製のホンダの中古耕運機と中国製の新品の耕運機と草刈り機を調達した。

ホンダ製の中古耕運機



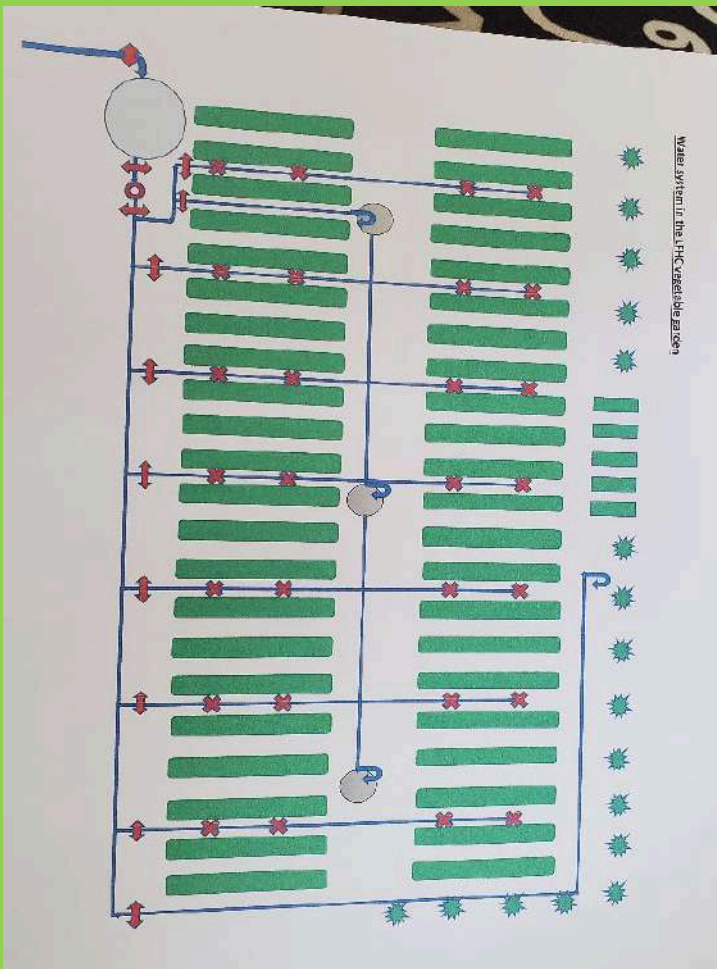
中国製の耕運機と草刈り機も到着

当初、日本から新品の耕運機を持参する予定だったが、現地調達したため予算に余裕が生まれた。そこで懸案である畑への散水設備を設ける計画を立て実施した。



散水設備の施工を開始

作業用の現地での施工図



元の図面は日本で作成。現地で施工図化ちょっとアニメっぽく寸法入っていないのが日本との違いですかね。

ステンレス製の給水用タンクの設置



このタンクで3,000L貯水できます。

これは加圧ポンプです。



水道とは違い、ただタンクから水を出すだけでは、水が噴き出しませんので圧力をかけます。その為のポンプです。点検や故障の時の為に、前後の配管にバルブを取付けます。

竣工した散水システム



この散水システムの完成によって、院内農園の収穫の歩留まりはかなり改善されるはずです。またスタッフの労働環境の改善や、マンパワーを医療行為に向ける事が出来るでしょう。

竣工して散水する前の状態



散 水 中

1年前の様子と比べると見違えるようです。



この散水システムの費用は資材費しかかかっていません。設置作業は電気工事も含めてすべてラオフレنزのスタッフ自身が施工いたしました。ですから費用はタンク、ポンプまで含めて資材費の10万円ちょっとしかかかっていません。

現在の院内農園の様子

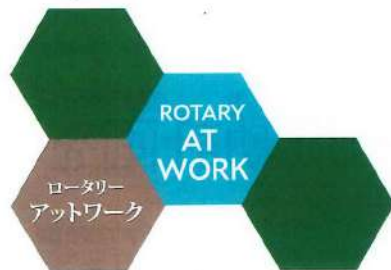
作業中の様子。耕運機で耕し、土の色を見ると湿っている様なので散水もした後のようです。1年前は畝と呼べる状態ではありませんでしたがこの写真ではしっかり畝があるのがわかります。



現在の院内農園

院内農園は県立病院の拡張の増築工事で元の場所から、小児病院の隣接地に移転されました。かえって環境良くなり綺麗に整備も行き届いて素晴らしい農園に成長しています。現在は作物の収穫だけではなく、来院患者への農業指導の場としても活躍しています。1回の支援が何倍もの乗数効果を生んだ事業になったと実感しております。





継続的支援がもたらした多くの実り

厚木県央R C

第 2780 地区・神奈川県



当クラブは 2018 年の創立 20 周年を機に、初めて国際奉仕事業に着手。東南アジアの貧しい国の一つ、ラオスで「ラオ・フレンズ小児病院支援プロジェクト」にチャレンジすることにしました。クラブ単独での国際奉仕には困難が付きものであるため、無駄なく事業を進めようと、現地で医療支援活動続ける特定NPO法人「フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN」と共同で事業を行うことにしました。現地の状況やニーズを受け、現在まで医療支援を中心に成果を上げています。

支援を開始してから 3 年目には地区補助金を活用して、病院の敷地内にある農園で「農業支援プロジェクト」を実施するに至ります。しかし、プロジェクトを開始した 2021 年は、世界中がコロナ禍に。そうした状況の中でも、訪問時にお世話になっている通訳や、パンデミック中もラオスで活動を続けていた同NPO法人の協力が得られたため、オンライン上で協議を重ね、何とか農業支援事業を成功させることができました。このプロジェクトでは、散水システムや貯水タンク、耕運機などの農機具を寄贈したことで、病院で使う食材を提供できただけでなく、患者家族

に農業指導を施すなど、さまざまな側面で成果を上げることができました。

昨年 2 月には、開院 10 周年を迎えたラオ・フレンズ小児病院の記念式典に招待してもらいました。現地を訪問した会員は、見違えるほどに整備された農園を目にし、たった 1 回の地区補助金事業が連鎖的にもたらした、乗数効果に感動していました。

昨年の 11 月、天皇后陛下の長女、愛子さまが初めての海外公務としてラオスを親善訪問され、20 日には同病院を視察されました。病院を運営する同法人代表で、われわれのカウンターパートである看護師の赤尾和美さんが愛子さまを先導し、病院をご案内している姿がテレビで放映されました。赤尾さんは愛子さまから心温まるお言葉を頂いたそうです。

将来的にラオ・フレンズ小児病院は、施設運営に関わる全ての業務をラオス人のスタッフに移管することを目標としています。一日でも早くその日が来ることを期待して、今後もクラブとして継続的にアプローチし、医療環境を充実させていきます。



散水設備は勿論、
耕運機も現役で
頑張っています。





国際奉仕活動を実施するには、クラブに潤沢な資金があって、語学が堪能な会員がいて、現地の事情に詳しい会員がいて……。そんな条件が必要だと思いませんか？ 厚木県央ロータリークラブ（RC）は創立20周年を迎えたことを機に、2018年からラオスで、クラブ初となる国際奉仕活動に着手しました。コロナ禍で海外での活動が制限される今こそ、厚木県央RCの活動を例に、コロナ収束後を見据え、国際奉仕の計画を進めてみませんか？

People of Action

初めての国際奉仕事業の楽しみ方

厚木県央ロータリークラブ 松本 豊



Point

1 頼りになる人がいるか
言葉が通じても、きちんとした支援ができるとは限りません。現地の事情に詳しい人にプロジェクトに関わってもらおうと、いろいろな情報をもらえます。

2 現地とクラブ例会をつなぐ
もし時間が合えばオンライン例会で、現地から活動の報告をしてみてもいい。臨場感あふれるレポートで、現地に行けなかったクラブの仲間の理解を深められることでしょう。

3 どんなものを支援するか
今回はクラブ独自のプロジェクトだったため、クラブの判断で支援物資を決めました。グローバル補助金、地区補助金を使う場合、支援の内容に制約があることがあります。

厚木県央RCは2018年に創立20周年を迎えたのを機に、初の国際奉仕活動として、ラオスのルアンパバーンにある小児病院の支援プロジェクトを実施しました。きっかけは、知り合いのロータリアンから、NPO法人が運営するラオ・フレンズ小児病院で活動をしている石田、赤尾和美さんについて聞いたことです（☞Point 1）。

決め手となった理由

第一に、同NPO法人は、小児病院を恒久的に支援するのではなく2025年をめどに、県立小児病院として引き渡すことを目標とし、治療だけでなく現地の医師の教育も行っています。そのため私たちも期限を定めた支援活動ができ、奉仕活動の目標達成が確認できると思いました。

第二は、間に入る機関がないことで、事務経費などがからず、寄付金の全てが子どもたちのために使われ、かつ、クラブ予算内で子どもたちへ提供できる医療物資が1年間分寄付できるため、限られた資金で多くの子どもの命を救えます。

第三は、赤尾さんの人柄と情熱です。海外から参加している医療スタッフが全員ボランティアという点にも感銘を受けました。日本人看護師は赤尾さん一人しかおらず、そんな中でも山間部

の村へ訪問診療に出掛けるなど、並大抵のことでは決してできない奉仕活動だと心を動かされました。

1回目の経験を経て、2回目

2018年に初めて現地を訪れた際、現地と日本の例会場をインターネットでつなぎ、同時中継で例会を開催しました。ラオス訪問員が現地から点検、立腹孝二会長（当時）と赤尾さんの対談を例会場のスクリーンで流しました（☞Point 2）。支援活動としては、点滴用シリジ（注射筒）を寄贈。これは赤尾さんからのリクエストの一つで、できるだけ多くの子どもを救えるもの、という理由です（☞Point 3）。

そして2回目は、病院についてより理解を深め、今後、ロータリー財団の補助金活用の対象になる可能性を画るべく、2020年2月20日から現地に赴きました。本来なら9人で参加（会員数38人）の予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により、5人で参加することに。安全管理上の問題、感染症対策、プライバシーの確保などの理由で、活動に制限がありました。

前日に引き続き、点滴用シリジを提供。今回はクラブ予算から2,000ドル分を拠出しました。これで1年分使えるとのこと。この他にも会員が折った千羽鶴やおもちゃを持参。その



あれれ、一人だけおそろいのシャツを着てない人が！会長を経験して、おなか周りも成長？？



現地のシャイな子どもにっこり

井寛明会長から赤尾さんに支援目録の贈呈

早起きして僧侶の托鉢も見学

資金は、地元の県前で行った街頭募金と会員からの寄付金を活用しました。

現地のことを知る

現地に着くと、赤尾さんが出迎えてくれました。ラオスの医療機関は非常に脆弱です。この小児病院は県立病院の敷地内にあるため、万が一、クラスターが起きてしまうと容易に医療体制が崩壊してしまいます。そのため、マスクを着用するよう厳しく言われました。ガイド兼通訳としては、日本語が堪能なブイ君がサポートしてくれました（☞Point 4）。

いよいよ活動開始

全員、ロータリーの公式ロゴが入ったおそろいのシャツを着て活動する予定でしたが、立腹会員は会長時の緊要から解放され、心も休も緩んだのかサイズが合わなくなり、1人、ロータリーの公式ロゴは付いているものの別のシャツで参加することになりました（☞Point 5）。

病院に到着後、すぐに活動開始。今回のテーマは「子供たちに笑顔を届ける」です。病院で過ごす子どもたちのために、輪投げと紙芝居を持参し、赤尾さんの指示に従い準備しました。シャイな国民性と言葉の壁があり、最初は遠慮がちだった子どもたちも次第

に積極的に参加。楽しんでもらえた実感しました。持参したおもちゃは、単に手渡しだけではなく、コミュニケーションが取れるよう、ゲームの景品として渡しました。ただ予想外だったのは、与えられると思ったカプセルトイは不人気で、シャボン玉セットが好評でした。

子どもたちとの交流後、病院内を見学しました。患者数に対してスペース不足を感じました。患者が多いため、廊下などにもベッドが置いてあり、病棟の軒下で毛布を敷いて仮眠を取っている付き添いの家族も……。

今年から始めたという院内農園も見学しました。この農園は食料の自給により病院の食費を節約するとともに、栽培した作物を販売し、病院の運営費用に充てることも目的としています。クラブでは今後、医療支援とともに、農業指導も奉仕活動の一環として検討したいと考えています（☞Point 6）。

活動が終わって

最終日、ルアンパバーンの街の雰囲気を楽しみました。世界遺産にも指定されているこの街は、メコン川に面した仏教の聖地。まだ夜が明けない頃から僧侶が托鉢に町を歩く姿を見ることができました（☞Point 7）。

（第2780地区 神奈川県）

4 現地のガイド

例えば現地にいる米山学友に連絡をしてみませんか。協力してくれるかも。母国での日本のロータリアンの活動を知ってもらえるいいチャンスです。現地の米山学友に連絡を取ってみたい場合は、米山記念奨学会にお問い合わせください。

5 ロータリーの公式ロゴ

せっかくロータリーの活動をするなら、ロータリーの公式ロゴ入りのシャツを着たり、風船を配ったりして、ロータリーを現地の人にも広報しましょう。

6 地元で問題点を発見

クラブで支援したいことが決まったら、地区補助金もしくは、グローバル補助金の活用を考えてみては？ クラブが単独で実施する支援より、支援の可能性が広がります。

7 観光

せっかく現地に来ているのですから、地元の雰囲気を見て回るのも大切なこと。地元の貨幣価値、地元の人々がどんなものを食べて、どんな家に住んでいるのか……。ゴルフは少しの間、我慢。

ロータリーの友誌 2020年12月号に見開き1ページで開催されました。

愛子様のご訪問

愛子さまが LFHC をご訪問！

FRIENDS
WITHOUT A BORDER

2025.12.27

https://fwab.jp/news/news_princessaiko/



何と昨年11月天皇陛下のお嬢様、敬宮愛子内親王殿下が初めての海外御公務でラオスをご訪問。その際に、わざわざラオ・フレンズ小児病院に足を運ばれ赤尾さんが、病院内を赤尾さんご案内されました。



愛子様
ご訪問の
ニュース映
像

